災害の教訓を風化させないための問題提起

あなたは震災のときの気持ち思い出すことができますか？

過去に類を見ない、未曾有の被害をもたらした「東日本大震災」から6年が経過し、人の暮らしが復興に向かうと共に、震災で得た教訓が風化しつつある。

災害時に住民同士が救護活動を主体的に行っていくための地域づくり

震災の記憶を過去に埋没させないための講演会を開催！

災害医療講演会(1月12日)

極限状態の医療現場の実状を知り「あたり前のように助けてくれると思っていた行政や病院の機能が、実際に災害が起こると、機能不全状況になる事を初めて知った」「自分達で協力してなんとかするしかないと思った」　⇒**危機意識を再認識**

課題

行政の力だけでは市民の命は守りきれない！

そこで・・住民を対象にワークショップを開催

減災対策のための地域づくりを住民同士が救護活動を主体的に行っていくためにどのようにおこなっていくことが必要であるか、住民自ら災害発生時の支援活動について自分たち自身で考え、見出し、関係者とどのように共同していくことができるのかの方向性を探る

詳細はコチラ
https://www.city.makinohara.shizuoka.jp/bg/kosodate_kyoiku/post-219.html

減災対策井戸端会議（ワークショップ）の内容

①研究責任者の研究結果報告から、被災発生時に必要な救護活動や避難所の暮らし、健康危機状態のイメージを持つ
②被災直後の共助の地域活動、地域組織の「あるべき姿」を共有する
③その実現に必要な資源、地域づくり活動について意見を出し合う
④被災直後から10日後頃までの救命活動を中心とする時期から避難所生活を運営するまでの「時間軸」と「危機の発生状況の変化」を意識
⑤グループをグラフィック化（可視化）し成果を共有

この研究から得たもの

大規模災害を乗り越えるためには、災害の危機感を住民一人ひとりが認識し、地域のつながりを強めていくこととによって減災は可能！

減災井戸端会議(2月10日)

研究者）
若杉早苗[1)]，古川馨子[2)]，山口舞[2)]，鈴木郁美[2)]
池山敦[3)]鈴木知代[1)]，仲村秀子[1)]，伊藤純子[1)]
川村佐和子[1)]
[1)]聖隷クリストファー大学，[2)]牧之原市役所健康づくり課
[3)]皇學館大学